

(最終版は『英語史研究ノート』(開文社、2008)をご覧ください。)

## ジョイスの「イーブリン」を原作と教科書版で比較読みする 読解指導への一つの示唆

向井 毅

ジョイスの『ダブリンの人びと』に収められた15篇のうち、「イーブリン」は思春期の若者が共感をおぼえる内容であり、また他のエピソードとは異なり比較的やさしい言葉で表現されている。それもあってか高等学校の検定教科書にも取り上げられている。しかしこの平易なテキストのなかに、見事な織り柄がひそんでいる。ストーリーの展開を読みながら、ことば(テクチャー)を読みとる必要がある。

教科書用の「イーブリン」は次のように始まる。

She sat at the window watching the evening deepen on the avenue. Her head leaned against the window curtain. She was tired. (*New Crystal IIB*, p. 98; 東京書籍)

この夕べは、幸せを約束する恋人フランクと南米ブエノスアイレスに駆け落ちする時であり、貧しく辛いダブリンの生活から抜けだすことができる時である。その夕暮れが「深まり」ゆく光景を見ながらイーブリンは窓辺に佇んでいる。一方、原作は次のように冒頭を提示している。

She sat at the window watching the evening invade the avenue. Her head was leaned against the window curtains and in her nostrils was the odour of dusty cretonne. She was tired. (*Dubliners*, p. 29; St. Martin's Press)

3人称語りながら、この情景描写には少女の心情が投影されている。この夕べの出立は、すでに小躍りして待つものではなく、不穏で避けておきたい夕べとなっている。動詞‘invade’がそれをものがたる。語彙のいわゆる「選択制限違反」を犯したこの動詞は、夕暮れを「外的侵入者(敵)」に見たて、恐怖をもたらす対象として観察している主人公の気持ちを表している。同時に物語の結末をも暗示する。狂乱のうちに死んだ母親の意味不明なことば(‘Derevaum Seraun’, p. 32)の思い出が彼女の決心をうながし、フランクに全てを託し、幸せを求めて旅立つために港にむかう。しかし土壇場で決心がくずれ、イーブリンは束縛と沈滞の町にとどまるのである。教科書が書き換えた‘deepen’(「深まる」)は客観的な情景描写となり、原作の仕掛けを壊している。

過去を回想し、未来を想いながら心が動き立つのを待つ彼女に、時が迫る。原作は再び窓辺の彼女を描写する。

Her time was running out, but she continued to sit by the window, leaning her head against the window curtain, inhaling the odour of dusty cretonne. (p. 32)

頭をカーテンにもたせかける姿とクレトン更紗の匂いの2つの描写素材は同じである。表現形式が異なるだけである。冒頭では、「疲れていた」の決め句が示唆するとおり、頭とカーテンの関係は受動表現により、鼻腔と更紗の匂いは存在の‘be’動詞表現により、それぞれ描かれていた。一方、時おいてここでは、「もたせかける」行為も「匂いを吸い込む」行為も、ともに能動表現に変わっている。懐かしく、愛おしむ少女への心情変化、つまり逃避行に生じた躊躇いが巧みに、形式の移し替えの中に描かれている。教科書版では、ただ「彼女は座り続けた」(‘... but she continued to sit by the window.’ p. 102)と描かれるだけである。

英語で作品を読むとは、一つに著者の立場に立つてことばそのものを注意深く観察し、表現内容に照らして一つの言語形式が選択される過程をたどる作業といえる。翻訳によらず、原語で読む意義はここにある。(ちなみに、新潮文庫の日本語訳には「夕闇が並木道にひろがってくるのをながめていた」とある。)内容や情報の理解に走りがちな英語学習法にあって、ことばづかいを大事にした指導法があってよい。